

受 験 番 号

令和八年度 中学校入学試験問題

国 語 (二次)

(時間 四十五分)

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図まで中を開いて見てはいけません。
- 二、受験番号(算用数字)を問題用紙・解答用紙のきめられた欄らんにかならず記入しなさい。
- 三、問題がぬけている、印刷がはっきりしないなどの場合は申し出なさい。
- 四、解答はかならず解答用紙のきめられた箇所かしょに記入しなさい。
- 五、何か用事のできた時には「はい」と言って手をあげなさい。ただし問題の内容についての質問をしてはいけません。

●句読点、記号は一字と数えること。

一

①～⑩の——のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。
(送りがなのある場合はそれも書くこと)

- ① 夢はウチュウ飛行士だ。
- ② 蔵でカケイズが見つかる。
- ③ カエルがタマゴを産む。
- ④ 寺に代々伝わる仏像をタツトブ。
- ⑤ セスジをのばす。
- ⑥ エンゲキ部に入る。
- ⑦ リンジ収入を得る。
- ⑧ 天窓から月の光が差しこむ。
- ⑨ あの作家は反骨精神がある。
- ⑩ 積年の努力が結果につながった。

二 次の問いに答えなさい。

問一 ①～⑤の□には同じ漢字が入ります。当てはまるものを漢字一字で答えなさい。なお、下は文学作品の題名です。

- ① 時は□なり―『閑寺』
- ② 目□をつける―『よだかの□』
- ③ 一□乱れぬ動き―『蜘蛛の□』
- ④ □馬の友―『取物語』
- ⑤ □上の楼閣―『握の□』

問二 ①～⑤の意味に当てはまる外来語を、次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 多くの人に同じ質問をして回答を求める方式の調査。
ア ディスカッション イ インタビュー ウ アンケート
- ② 態度や考え方が積極的である様子。
ア ポジティブ イ ネガティブ ウ メリット
- ③ 防災を目的に、災害に遭う地域を予測し表示した地図。
ア バリアフリー イ ハザードマップ ウ セキュリティ
- ④ 一つのを分かち合い共有すること。また、一つのを何人かで分けること。
ア シェア イ ケア ウ コミュニティ
- ⑤ 自分の能力や価値を高く評価し、それを大切に思う気持ち。
ア プライバシー イ プロフェッショナル ウ プライド

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学校入学をひかえた「わたし」(優^{ゆう}菜)は、ある日「おばあちゃん」が四月から青葉中学校の夜間学級に通うつもりだということを知る。

「夜間学級って、夜間中学のこと？」

夜間中学という言葉が出たとたん、おばあちゃんはうれしそうな顔になった。

「あんた、知ってるの？ 夜間中学」

「うん、まあ、聞いたことくらいはあるよ」

お父さんは、曖^{あいまい}昧^{まい}にうなずいた。

お父さんが知っていたというのも、意外だった。わたしは、「夜間中学」なんて初めて聞いた。「夜間高校」なら聞いたことがあるけど。

「夜間中学って、夜に授業をする中学校ってこと？」

おばあちゃんとお父さんにたずねた。すると、

「夕方の五時半から九時まで」

おばあちゃんから、すぐに答えが返ってきた。

「四月からそこに行こうと思ってるんだよ」

「そんなこと、今初めて聞いたんだけど」

お父さんの機嫌^{げん}が悪くなっているのが、声でわかった。おばあちゃん
は、小さな声で、

「なんだか言いにくくてさ。今さら中学校に行きたいなんて」

申し訳^{わけ}なさそうに言った。お父さんは慥^{※ぶぜん}然^{ぜん}として、

「なんでそんなところに行かなきゃいけないのか、まずきちんと理由を説明してくれよ」

と、おばあちゃんを見た。理由を説明しろと言われて、おばあちゃんの顔がこわばった。それでも、話^①すしかないお腹^①をくくついたらしい。過去に犯^{おか}した罪を告白するように、つかえつかえ語りだした。

学校へは、数えるほどしか行っていない。小学校は一応卒業させてもらったけれど、中学校は卒業どころか入学もしていない。

「嘘^{うそ}」

思わず口から出た。

「嘘じゃないよ。本当に、行ってないんだよ」

今にも消えてしまいそうな声だった。小学校も低学年のころしか行っていないので、漢字はほとんど読めないし、書けないとおばあちゃんは言った。

「漢字が読めない？」

お父さんは、「なんだ、それ……」と頭^{かぶ}を抱^{かか}えた。

小学校にも中学校にも行かなかったなどということが、世の中にあるのだろうか。六年の社会の授業で、「小学校と中学校は義務教育」と習った。それは、昔から決まっていたと聞いている。おばあちゃんが子ども
のところだって、そうだったはずだ。

「もしかして、不登校の人だったの？」

学校に行かない理由は、それしか思いつかなかった。

六年のとき、わたしのクラスにもひとりいた。上村くんという男の子で、卒業式も来なかった。

「フトウコウ？」

おばあちゃんは、言葉の意味がわからないようだった。「学校に来たくない人」と教えてあげた。

「そういうのじゃないけどね」

「じゃあ、病気？」

おばあちゃんの返事を待たず、お母さんが口をはさんだ。

「昔はね、戦争とか戦争のあとの混乱で、学校に行けない子どもがいたのよ」

「え？ 戦争のとき、もう生まれてたの？」

びっくりした。

「当たり前でしょ」

お母さんは、「なにを今さら」という顔をした。

「おばあちゃんて、何歳？」

おばあちゃんの年を確認した。

「もうすぐ七十六になるよ」

七十六。七十六歳の人って、戦争のときには生まれてたのか。

そういえば、去年、「戦争が終わって、七十年」だとニュースで言っていた。引き算をすれば、すぐにわかることだった。戦争のとき、おば

あちゃんは、生まれてたんだ。なぜ気づかなかったんだろう。

戦争は大昔のことで、そのころ日本にいた人たちは、もうみんな亡くなってきているのだと思いきんでいた。戦争の時代のことなんて、今の日本人には全く関係ないし、過ぎ去ったことだと思っていた。それなのに、その影響が今も残っているなんて。しかも、うちのおばあちゃんに、

「お母さんの知り合いのお父さんにも、そういう人がいたわよ」

お母さんは言った。

おばあちゃんの話では、青葉中学には、そういう人のために夜間学級があるのだそう。それを「夜間中学」と呼ぶらしい。

おばあちゃんがひらがなの読み書きしかできないことを、おじいちゃんは知っていた。だから、ずっと家の中の「文字を書く」「読む」という役割をはたしてくれていたらしい。でも、そのおじいちゃんが、三ヶ月前に亡くなった。亡くなる直前まで、おばあちゃんのことを気にしていたそう。

「前から、自分で新聞を読んだり、手紙を書いたりできるようになりたいたとは思ってたんだよ」

おばあちゃんは言った。

「はあ」

お父さんは、わざとらしく大きなため息をついた。

「そんなことくらいなら、家でできるだろ。オレや理恵が教えてやるよ」

おばあちゃんは、あわてて説明を加えた。

「中学に行ったら、字だけじゃなくてほかにもいろいろな勉強を教えるよ」

くれるって、先生がおっしゃるんだよ」

おばあちゃんは字だけではなくて、いろいろな勉強をしたいと思っ
ているらしい。こんなおばあちゃんになっているのに、勉強したいだなん
て驚きだ。

おばあちゃんは、小さな体をより小さくして頭を下げた。

「みんなには迷惑かけるかもしれないけど、年寄りの道楽だと思っ
てくれないかねえ」

「道楽だなんて思わない。すごくいいと思う」

お母さんは、「すごくいい」に力をこめた。

「今からでも勉強したいって、おばあちゃん、立派だわ」

「そうかい？」

お嫁さんであるお母さんにほめられて、おばあちゃんの顔がほころ
んだ。

「ね？ 優菜もそう思うわよね」

お母さんに聞かれて、^⑤反射的にうなずいた。

「ね？ お父さん」

お母さんは、お父さんにも同意を求めた。お父さんは、

「あ、ああ。うん。そうだな」

ちよつと考えながら、うなずいた。

「でもなあ、五時半だろ。送ってあげられないよ。オレも理恵も帰っ
て来るのが遅いし」

お父さんは車のセールスをしている。帰って来るのは、いつも九時ご

ろだ。お母さんは、お店は七時までだけれど、家に着くのは八時ごろだ。
お店が長引いたときは、九時を過ぎることだつてめずらしくない。どっ
ちもおばあちゃんが学校へ行く時間には間に合わない。

「ひとりで行けるよ。青葉駅までたった三駅だし。学校は、駅からすぐ
なんだよ。おじいちゃんが入院してた病院より、うんと近いんだから」

おじいちゃんは、三年近く入院をくり返していた。おばあちゃん
は、その間、ほぼ毎日ひとりでバスに乗って病院に通っていた。

お父さんは、反対こそしていないが、すっきりしていないのはだれの
目から見ても明らかだった。「べつにそんなところに通う必要なんてな
い」と思っているのだろう。

「ダメかねえ」

おばあちゃんは、お父さんの顔をのぞきこんだ。

「ダメとは言わないけど、夜だし、危なくないか？」

ぐずぐずと言葉をにごすお父さんに、おばあちゃんは、決定的なひと
ことを告げた。

「困ったねえ。実はもう、入れてくださいって、校長先生にお願いして
きちゃったんだよ」

「ええっ！ もう頼んできたのか？」

お父さんだけではない。わたしも、お母さんも、驚いておばあちゃん
の顔を見た。

いつのまにそんなことをしていたのだろう。おばあちゃんは、いつも
人の言うことに「はい、はい」と言っているタイプで、自分からなにか

をするということはない。それなのに、たったひとりで中学校に乗りこんで、入学まで決めてきた？

「じゃあ、許すも許さないもないだろ。もう決めてるんじゃないか」

お父さんは、不機嫌な声を出した。

「そうだねえ。そういうことになるかねえ」

おばあちゃんは、

「やっぱりいけなかったかねえ。わたしみたいなのが学校に行きたいなんて」

さびしそうな顔でつぶやいた。

「いけないなんてこと、ありません！ 行けばいいのよ、おばあちゃん」

お母さんが、あわてて言った。

「お父さんは、夜出歩くことを心配しているだけで、学校そのものに反対しているんじゃないんですよ。ね、お父さん」

お母さんに念押しされて、お父さんは、

「まあ、そういうことだ」

とぼそつと答えた。

「だから、気をつけて通ってくれるならいいんですよ」

「そうかい。じゃあ、気をつけて通うよ。子どもじゃないんだから、心配

配らないよ」

おばあちゃんは、

「よろしくお願いします」

うれしそうに頭を下げた。どうやら、おばあちゃんの夜間中学行きは

決定のようだ。

〔 中略 〕

四時過ぎに家に帰って来ると、おばあちゃんはきまって台所のテーブルで勉強している。のぞいてみると、漢字ノートに「花」とか「草」とか小学一年生が習うような漢字を書いている。初めはびっくりした。漢字の読み書きができないとは聞いていたけれど、ここまでだとは思わなかった。それに、よく見ると、毎日似たような漢字ばかり書いているのだ。

「昨日覚えたと思っても、今日になると忘れてるから、何回も何回も書いてるんだよ」

とおばあちゃんと言う。

内心、「こんなの書いてて、楽しいのかな」と思っている。おばあちゃんには言わないけれど。

おばあちゃんが夜間中学に行くと言ったとき、お母さんは「いいことだ」と言って、わたしももうなずいた。でも、本当は、なんでこんなに年をとってから勉強したいと思うのか不思議だった。今もそう思っている。なんのために行くんだろう。中学を出たって、この先高校や大学に行くわけでもないのに。字が読めないのは不便だけれど、今まで何十年もそうやって過ごしてきたのだから、今さら習わなくてもいいのじゃないか。

わたしだったら、学校に行きたいなんて絶対に考えないと思う。夕方に出て行って勉強して、夜遅く帰って来るなんて、まっぴらだ。夜は、

テレビを見たり、家でごろごろしてたりするほうが断然いい。

それに、わたしは、どうしても納得できないでいるのだ。おばあちゃんが、小学校すらまともに行っていないという事実について。

お母さんは、「戦後の混乱」と言っただけで、戦争が終わったときはまだ五歳だったはずだ。小学校に行く年齢じゃない。じゃあ、戦後の混乱なんて関係ないのではないか。もしかしたら、一年生のときはまだ大変だったかもしれないけれど、さすがに高学年になるころには、おさまっていたのではないだろうか。中学なら、絶対影響なんてなかった気がする。

それなのに行かなかったおばあちゃんは、本当はなまけていたのではないだろうか。

わたしは、思いきって聞いてみた。

「ねえ、どうして子どものころ学校に行かなかったの？ 戦後がどうのこうのっていつても、おばあちゃんが小学校に上がる一年以上前に戦争は終わってたんでしょ。行こうと思えば、行けたんじゃないの？」

たぶん、ちょっと意地悪な気持ちになっていたんだと思う。おばあちゃんが、あんまり楽しそうで、一生懸命勉強してる真面目ちゃんだから。本当は昔、さぼってたんじゃないのって、言ってみようかみたいな気持ちだったのだ。

おばあちゃんは、少し困った顔をした。

「そうだねえ。行こうと思えば、行けたのかもしれないねえ」

やっぱり、と思った。本当は行けたんだ。

「でも、学校なんて、自分には縁のないものって思ってたんだよ」

「それですんじゃないの？ 家の人や先生にしかられたりしなかった？」

「しかられないよ」

おばあちゃんは、悪びれる様子もなく答えた。

「ずいぶんのきな時代だ。今だったら、「不登校だ」とか「親はなにしてるんだ」とか世間が放っておかないだろう。」

「そんな子はあたしだけじゃなかったし。家が貧しくて、働いてる子どもだった。子どもも働き手だったんだ。働かなきゃ食べていけない時代だったんだよ」

「子どもなのに？」

そんなのおかしい。芸能界の子役ならまだしも、子どもを雇うところなんてあるはずがない。そんな嘘をつかないで、学校に行きたくなかったのなら、「行きたくなかったのだ」と正直に認めればいいのに。

⑥ だけど、そのあとに続いたおばあちゃんの話に、わたしは自分がいかに甘いかを思い知らされた。

「戦争が終わったからっていつて、一年や二年で元どおりになるなんてことはなかったんだよ。死んじゃった人は帰って来ないしね。父親は戦争に行つて、そのまま帰って来なかったんだ。ゆうなは知らないと思うけど、あたしにはふたつ下の弟がいてね。母親がひとりで、あたしたちと体の悪いおばあさんをみてくれてたんだよ。母親が働きに行っている間、洗濯したり、ごはんを炊いたり、弟のお守りをしたり、おばあさん

の世話をしたりするのは、あたしの役目だったんだ」

「おばあちゃんの役目って……。まだ五歳だったんでしょ」

五歳といえ、まだ幼稚園児だ。少し前までおむつをしていたような年だ。そんな子が家事をしてた？

おばあちゃんは、昔のことを思い出すように目を細めた。

「ごはんひとつ炊くのも、今とは比べものにならないくらい手間がかかったんだよ。うちは貧しくてガスなんてなかったからさ、木で炊くんだよ。かまどでね。ごはんを炊いて、お汁を作ってた」

「そんな小さい子が、火なんて使ってた危険じゃないの？」

火は危ないと、さんざん言い聞かされて育ってきた。わたしだけじゃなくて、同級生の子たちもみんなそうだ。初めてマッチで火をつけたのは、五年生の理科だ。マッチをするたびにドキドキした。家庭科でガスを使うときは、さらに大事だった。それを五歳で？

「今から思えば危ないよねえ」

おばあちゃんは、笑った。

「洗濯でもなんでも、機械なんてないからさ、みんな手洗いで。冬はつらかったよ。弟はぐずぐず泣いてばかりだし。ちよつとでも時間があるときは、くず拾いをしたんだ。釘とかネジとかを拾って『くず屋さん』に持って行くと、お金をくれるんだ。農家に手伝いにも行った。農家には、わたしと同じように学校に行かないで働いている子が何人もいたよ」

「おばあちゃん以外にもってこと？」

「ああ、戦争が終わった直後は、親のいない行くあてもない子は、のきなみ農家に連れて行かれることもあったんだよ」

「でも……、そんなのいいの？ 法律とか」

くわしいことはわからないが、許される話ではない気がする。けれど、おばあちゃんはあつさり言った。

「死ぬよりはまじだよ」

死ぬか、働くか。子どもがそんな選択を迫られる時代だったのだ。

「あたしはね、家族もいたし、住む家だってあった。だから、それだけで幸せと思わなきゃいけなかったんだ」

おばあちゃんは、かみしめるように言った。

「小学校には、何回か行ったんだよ。弟を連れてね。でも、たまにしか行かないから、席がないんだよ。それで、先生が来るまでずっと立って待っていきやいけなくてさ。それがいちばんイヤだったね。底なしの貧乏だったから身なりも汚いし、お弁当も持って行けないし。バカにされるのもイヤだったんだよ。でも、今考えれば、ゆうなの言うとおおり、行こうと思えば行けたのかもしれない」

小さな弟の手を引いて学校に行く女の子。想像してみようとしたけれど、今ひとつ明確には思い描けなかった。でも、もし、それが自分だったら耐えられないなと思った。

「結局小学校はほとんど行かなかったけど、先生は、なんにも言わなかったよ。言ってもどうしようもないって思ってたんだらうね」

「……おばあちゃんのお母さんは？」

自分の子どもが学校に行けないのに、なにも言わなかったんだろうか。

「なにも言わなかったよ」

おばあちゃんは、優しい顔で言った。

⑦「なにも言えなかったんだよ、きつと」

おばあちゃんの目は、遠くのほうを見つめていた。まるでそこに、自分のお母さんの姿が見えるみたいに。

「あたしはね、学校に行くより、弟の世話をしたり、ごはんを作ったりしてるほうがよかったんだよ。合間を見て働くこともつらくなかった。自分が家族を支えていると思うと、うれしくらいだった。ずっと、そう思ってた。でもね、あるとき、ごはんを炊きながら、炎を見てたんだ。めらめら薪が燃える様子をさ。そしたら、急に涙がぼろぼろ落ちてきてさ。気がついたらおいおい泣いてた。あのとき、なんで泣いたのか自分でもわからなかったけど、もしかしたら、胸の奥のほうではつらかったのかもしれないねえ」

かまどの前で、ひとり泣いている小さな女の子の姿を思うと、胸が痛んだ。小さいころのおばあちゃんに会いに行ってくださいしめてあげたいと思っただ。がんばってるね。偉いねって。

⑧おばあちゃんは、学校に行かないまま大人になった。読み書きができてなくても、仕事はなんとかあったらしい。

「けどさ、読み書きできないっていうのはやっぱり不便だね。いちばん困ったのは、お通夜だよ」

「お通夜？」

「ゆうなは、まだ行ったことないだろうけど、お通夜とかお葬式ってのは、行くと、住所と名前を書かないといけないんだよ。ひらがななら書けるけど、まさか、全部ひらがなで書くわけにいかないじゃないか。それで帰ってきたこともある」

わたしは、黙っておばあちゃんの話に聞きいていた。

「そんなとき、字を覚えたいと思ったよ。おじいちゃんが元気なころは、いつも助けてくれたけどね。でもね、おばあちゃん、けんじの名前もゆうなの名前もちゃんと書けないんだよ。なさけないよねえ。自分の子どもや孫の名前を書けないなんて」

「いいよ。わたしの名前なんて書けなくても」

わたしは、軽い気持ちで言ったのだけれど、おばあちゃんは、たちまちさびしそうな顔になった。

「そうかもしれない。けどね、自分は、人がやらなきゃいけないことをやってきてないって気がしてさ。大きな忘れ物してるみたいなさ」

「学校に行けなかったのは、おばあちゃんのせいじゃないのに」

「そうかもしれないけどね」

おばあちゃんは、自分の手に視線を移した。大人にしては小さな、皺々の手。その手をにぎったり開いたりしながら、なにかを考えている。しばらくそうしてから、おばあちゃんは口を開いた。

「青葉中学の夜間学級は、おじいちゃんの病院に行くときのバスで見かけたんだよ。看板が出てたんだ」

校門の横に看板があつて、「働きながら勉強できる」とか「いつでも相談に来てください」とか書いてあるらしい。ちゃんとふりがなが打つてあるので読めたのだそうだ。

「初めて見たときは、あんまりよく意味がわからなかつたんだ。でも、病院にチラシが置いてあつてね。『何歳からでも、いつからでも入れます。だれでも入れます』ってね。おじいちゃんに見せたら、『これはおまえみたいな人間のための学校だ。行けばいい』って。でもね、おじいちゃんの看病もあるしね。そんなわけにはいかないって話してたんだよ。だけど、どうしても気になつて。おじいちゃんの病院に通つてた三年間、ずうつと考えてたんよ。どうしよう、どうしようって」

三年間も！

「迷いすぎだよ、おばあちゃん」

「けど、迷つたんだよ。こんなおばあさんが中学校に行きたいなんて言つたら笑われるんじゃないかってね」

頭に、チラツとお父さんの顔が浮かんた。

「電話で聞いてみたんだよ。今年七十六になるんですけど、入れますかって」

「そしたら？」

「明日からでも来てくださいって。いつでもお待ちしていますって」

よかつた、と胸をなでおろした。そこで冷たい言い方をされていたら、おばあちゃんは、やめていたかもしれない。優しい人が出てくれてよかつた。

⑨
いつのまにか、わたしは、心からおばあちゃんが夜間中学に通うことを応援したいという気持ちになつていた。

『夜間中学へようこそ』山本悦子（山崎書店）

※無然として：不機嫌で、腹を立てている様子。

※戦争が終わつて、七十年：物語の舞台は、二〇一六年。

※道楽：趣味や遊びに熱中して楽しむこと。

問一 —— ①、—— ②の意味として最もよいものを次よりそれぞれ選

び、記号で答えなさい。

①「腹をくくつた」

ア 緊張した

イ 覚悟を決めた

ウ あきらめた

エ 我慢をした

②「口をはさんだ」

ア 話に割り込んだ

イ 意見を言った

ウ 橋渡しをした

エ 事情を教えた

問二 —— ③とありますが、「それなのに」「しかも」と言葉を重ねる「わたし」の様子として最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんが戦争の影響を受けたのは当然のことなのに、それに気づけなかったので投げやりになっている様子。

イ 今の日本人のなかに、なぜまだ戦争の影響を受けた人がいるのか分からず、混乱している様子。

ウ 戦後七十年もたつのに、おばあちゃんがまだ今の日本人に戦争の影響が残っていると思っていることとまどっている様子。

エ 戦時中に日本にいた人たちの多くはもう亡くなっている一方で、おばあちゃんはまだ元気で暮らしていることに感動している様子。

オ 戦争は大昔の出来事だと思っていたが、その影響を受けた人が、自分の身近に存在していたことに驚いている様子。

問三 —— ④はどのような人を指していますか。十五字程度で答えなさい。

問四 —— ⑤のときの「わたし」について説明したものとして、最もよいものを次より選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんが今から勉強したいと思っていることが不思議だったが、お母さんに同意を求められ、ひとまずうなずいた。

イ おばあちゃんが今から勉強したいと思っていることに納得できない一方で、応援したい気持ちもあり、複雑な思いでうなずいた。

ウ おばあちゃんが今から勉強することに心から賛成していたが、反対しているお父さんの手前、ひかえめにうなずいた。

エ おばあちゃんが今から勉強したいと思っていることに驚いて声も出せずにいたが、おばあちゃんが喜ぶと思つてうなずいた。

オ おばあちゃんが今から勉強することをはずかしく思っているが、言い出せるわけもなくうなずいた。

問五 —— ⑥とありますが、どういうことですか。最もよいものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア はじめはおばあちゃんが嘘をつくことにいらだちを感じていたが、おばあちゃんの話聞いて、自分の価値観だけで物事を判断することは間違いなのだと気づいた。

イ はじめは戦後の混乱がすぐに収まるわけがないと思っていたが、おばあちゃんの話聞いて、自分の想像が間違いであったということを知った。

ウ はじめはおばあちゃんが学校に行かなかったことをうらやましく思っていたが、おばあちゃんの話聞いて、子どもが社会に出て働くことの厳しさを実感した。

エ はじめは戦後の大変な状況ききょうを想像できなかったが、おばあちゃんの話聞いて、自分の経験からは考えられない現実がかつてはあったのだということを理解した。

オ はじめは戦後の混乱のもとで子どもが働くことはしかたないことだと思っていたが、おばあちゃんの話聞いて、自分の考えが正しかったことを確信した。

問六 —— ⑦とありますが、このとき「おばあちゃん」は自分のお母さんの気持ちをどのように理解していますか。 I ~ III に当てはまる内容を指示にしたがって答えなさい。

当時は

I (二十字以内)

 時代だったので、

II (五字以内) ためには自分の子どもに家事を任せるしかなく、
III (十字以内) と言えないでいたと理解している。

問七 —— ⑧とありますが、「おばあちゃん」はこのことをどのようにとらえていますか。「おばあちゃん」自身の言葉で、たとえを使って表現している部分を十五字以内でぬき出しなさい。

問八 —— ⑨とありますが、それはなぜですか。「中略」以降の「おばあちゃん」と「わたし」のやり取りをふまえながら、三行以内で説明しなさい。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昆虫の話をしていると、「カメムシは、部屋に入ってくるし、臭いにおいを出すから害虫だ」とか、「ミツバチは、ハチミツをつくっているから益虫だ」といった表現を耳にすることがあります。この「害虫」や「益虫」という表現は、その昆虫が、人間のために役に立つかどうかというだけで判断したものです。そのため昆虫の一面しかみていないことが多いのです。

もともと日本では害虫や益虫といった考え方はありませんでした。文明開化が起こった明治時代に、欧米から害虫を管理するという考え方が持ち込まれました。そこから人間の生活や農作物の生産にあたる影響によって、昆虫を区別するようになったのです。

農業害虫とされる昆虫は、実に多様です。農作物ごとにそれぞれ違っています。例えば水稲だと、バッタやカメムシの仲間に加えて、チヨウやガの仲間が代表的なものとして挙げられます。特に日本では水田の稲に害をもたらす昆虫を防除するために、大学や研究所でさまざまな研究が進められてきました。収穫前のコメに口吻を突き刺して黒い点を残してしまうことで「斑点米」をつくってしまうカメムシや、イネの葉や茎を吸って病原菌を媒介し、枯らしてしまうウンカやヨコバイなどがいます。茎や葉を食べてしまうチヨウやガの幼虫もいます。これらの昆虫の生活史や生態はとてよく研究され、個体数を減らすための工夫や技術が発展してきました。

一方、益虫とよばれる昆虫としては、絹をつくるカイコやハチミツを生産するミツバチが代表例として挙げられます。カイコについては、大量生産や管理、品質向上のために膨大な研究がなされてきましたし、セイヨウミツバチも生態や飼育方法が十分に確立しています。

野生のハナバチを含む昆虫たちを利用した花粉媒介については、日本では、1970年代から1990年代にかけて、研究が盛んに行われていました。特にリンゴ園で活躍しているマメコバチの利用方法や普及活動が、東北地方を中心に進められました。

それでも、益虫についての研究の数はまだまだ多くありません。その理由の一つは、それぞれの昆虫がどんな役割を果たしているかわからなかったため、身近にいても、あまり関心をもたれなかったということがあります。害をもたらす場合には積極的に注目されますが、利益をもたらしてくれる場合には静観し、わざわざ手を加えるということにはなかつたのです。

益虫や害虫といった考え方は、あくまで④的なものです。昆虫自身が、害虫になりたいと思っただけではありません。どちらの昆虫たちも、生態系の一部としてとらえてみると、大切な役割を果たしているのです。

これまで、人間は自然生態系の中にあるものは、自分たちだけが利用するのだと考えて、どんどん使ってきました。自分たちの生活を維持するために、生態系を利用するという、人間中心の考え方です。しかし

2000年代になると、その考えが変わりはじめます。私たち人間は、自然からさまざまな恩恵をサービスしてもらって生活している、という考え方です。これを生態系サービスとよんでいます。

このきっかけとなったのが、2001年から2005年にかけて、国連の主導で実施された「ミレニアム生態系評価」です。それまで私たち人間は、生態系を利用しながら、環境破壊や生物の多様性の喪失につながることを続けてきました。

1950年代ごろから、人口の増加や経済発展にもなあって、世界中で生態系から受けてきた恩恵を、さらに使い込むようになったのです。多くの土地を農耕地につくりかえたり、マングローブ林やサンゴ礁を破壊したり、魚などの海産物を過剰に獲るなど、人間生活を豊かにすることに目を向けて活動してきました。

⑤、ミレニアム生態系評価によって、こうした生態系の変化が人間の生活の豊かさにも悪影響を及ぼすということが、初めて報告されたのです。ここから、生態系や、生態系サービスが劣化したというようにするために、重要性や価値を評価するようになったのです。

生態系サービスには、いくつかのサービスが含まれています。大きな柱として、⑥「供給サービス」、「調整サービス」、「文化的サービス」、「基盤サービス」の四つがあります。この中にはさらに細かなサービスがいくつも含まれています(図3-4)。

⑦、わたしたちの生活に関わる食料や水、燃料、資源の供給といったものは、供給サービスになります。農作物への花粉媒介や気候・

洪水の制御は調整サービス、森林浴などによってリラックスすることは文化的サービスと、それぞれ分けることができます。

これら3つのサービスを支えているのが基盤サービスです。基盤サービスは土壌の形成や酸素の生成、水の循環といったもので、どのサービスをする上でも重要です。わたしたちの社会はこれらのサービスに頼って成り立っているために、どれか一つでも欠けてしまうと、途端に困った状態に陥ってしまいます。

<p>基盤サービス 3つの生態系サービスの土台となるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大気や水の循環 ・ 土壌の形成など 	<p>供給サービス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 食料 (穀物・家畜・養殖など) ・ 淡水 ・ 燃料 ・ 木材および繊維など ・ 医薬品 ・ 遺伝子資源
	<p>調整サービス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大気や気候の調節 ・ 洪水制御 ・ 水の浄化 ・ 病虫害抑制 ・ 花粉媒介 ・ 疫病予防
	<p>文化的サービス</p> <ul style="list-style-type: none"> ※しん ・ 審美的価値 ・ 精神的価値 ・ 宗教的価値 ・ レクリエーション

(MEA2005をもとに作成)

図3-4 生態系サービスの分類

生態系が私たちにもたらしてくれるサービスは、人間が自分たちで行おうとすると、とんでもなく大変な労力と費用がかかります。

地球全体での生態系サービスすべての価値を試算すると、2011年の試算では、1年あたり約1京8250兆円（年125兆ドル）という途方もない金額になることがわかりました。

⑧※、ハナバチやほかの昆虫たちによる花粉媒介サービス（送粉サービス）についてみてみましょう。果樹園でリンゴやナシ、オウトウなどを栽培する場合や、露地（屋根などが無い、一般的な畑の状態）で、トマトやカボチャなど果菜を栽培する場合には、花粉を媒介してくれる生物が必要です。

農作物のうち、約75%は動物（大半が昆虫）が、花粉を媒介するというサービスをしてくれることで、生産できています。そのため、彼らによるサービスの効果がとても大きいことは、なんとなく想像が付きまします。経済的な視点からみて、価値を金額で表してみると、驚くべき値段が出てきました。

IPBES（生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学—政策プラットフォーム）が試算したところ、送粉サービスは、1年間に約33兆〜82兆円（2350億〜5770億ドル）もの価値があると結論づけられました。

日本での送粉サービスの価値は、2013年時点の評価では約4700億円となっています。このうち、野生ハナバチなどによる貢献は3330億円になります。セイヨウミツバチによるサービスが約

1000億円ですので、全体の4分の3にあたる割合を野生の昆虫たちが送粉してくれていることになります。

〔中略〕

私たちが、昆虫やほかの動物に頼らずに農作物を生産しようとする、先ほど紹介した金額を用意して人を雇ったり、機械を使ったりしなければいけなくなります。もちろん、そんな莫大な額を支払うことは誰にもできません。

ハナバチたちに頼らずに授粉しようとする、人が手作業で行うことになります。例えばリンゴの場合、まだ開花していないつぼみを大量に採取し、中にある葯を取りだします。もしくは業者を通じて授粉用の花粉を購入します。花粉を噴霧器に充填したら、園地の端から端まですべての花に花粉を吹き付けていきます。このとき、噴霧器を使わずに、梵天という先がふわふわした器具を使って一つずつの花に花粉をつけていくこともあります（図略）。どちらにしても大変な作業になるのです。

あるリンゴ農家は、リンゴの開花期になると、数日間ほとんど寝ないで、果樹園の中を、花の一つずつに花粉をつけて回っているとおっしゃっていました。広大な果樹園の中に咲く花に、残らず花粉をつけていくというのは、とても労力がある大変な作業です。やはりハナバチたちの力を借りたくなくなります。

日本で生産されている農作物は、露地栽培か、ハウスのような施設栽培のどちらかで栽培されています。どちらの栽培方法でも、ハナバチたちの活躍は欠かせません。

皆さんが口にすることのある、甘い果物といえはなんでしょうか。イチゴやメロン、スイカなどが思い浮かぶかもしれません。これらの作物をつくる時にもミツバチやマルハナバチが活躍しています。

農林水産省によれば、例えばイチゴでは、施設栽培が行われている面積は、日本全国で合わせて3000ヘクタールにもなります。この8割以上でセイヨウミツバチを利用して送粉をしています。メロンは2000ヘクタールの8割、スイカも1700ヘクタールの5割にあたる場所でミツバチが利用されているのです。

これだけではありません。玉ねぎやキャベツの生産にもミツバチは関わっています。これらの農作物は果実の部分を食べるわけではありません。よくホームセンターなどで野菜の種などが小さな袋に入って販売されています。この、種まき用の種をつくるために、送粉が必要なのです。

マルハナバチも同じです。施設栽培がされているトマトやナスといった農作物に加えて、ピーマンやズッキーニ、ミツバチが使われているイチゴでも利用されています。トマトの場合には、栽培施設面積6000ヘクタールのうち、約4割で導入されています。

できあがった果実をみてみましょう。左右のバランスが取れていた、大きなサイズだったりするものは、うまく種子ができ、果実の中でバランスよく配置されています。このような品質の良いものは、商品価値も高くなります。ハナバチたちが訪れて花粉を媒介すると、こうした形の良い果実が多くできあがります。一方で、受粉がうまくできないと、つぶれたりゆがんだような奇形果になったりします。こうなると、

食べたときの食感も悪いですし、商品としても価値がつきにくくなります。

また、ハナバチに頼らずに、人工授粉によって、種子を多く含む果実になるようにするには、一つずつの花に丁寧に、正確に花粉を柱頭につけていかなければいけません。

イネや小麦といった主要な農作物の生産によって、私たちはお米やパンを食べることができます。でもそれだけの食卓は、とても味気なくて寂しいものです。やっぱり色鮮やかな野菜や、おいしい果物が一緒に欲しくなります。こういった野菜や果物の存在は、栄養バランスの面でも大事なことではなく、私たちの生活の豊かさにも大きく関係しています。

もし、ハナバチたちの送粉サービスに頼れなくなったら、私たちの食生活が大きく変化してしまうでしょう。それだけではなく、野生の花々が咲き誇る光景を見ることが、叶わなくなるかもしれないのです。

『もしもハチがいなくなったら?』横井智之(岩波ジュニア新書)

※口吻：口先・口元のこと。

※静観：静かに観察すること。

※審美的価値：そのものもつ「美しさ」に対する価値。

※京：「兆」の次に大きい数の単位。

※ハナバチ：ミツバチやマルハナバチなどの総称。

※セイヨウミツバチ：送粉のために飼育されている。本文中のミツバ

チはセイヨウミツバチを指す。

※充填：空間や容器に物質をつめこむこと。

※マルハナバチ：送粉のために飼育されているハナバチの一種。

問一 ——— ①について、本文中で「益虫」として紹介されている虫には、

どのようなものがありますか。次よりすべて選び、記号で答えなさい。

- ア ミツバチ イ バッタ ウ カメムシ エ カイコ
オ チョウ カ ガ キ ウンカ ク ヨコバイ

問二 ——— ②の三字熟語の組み立てと同じものを次よりすべて選び、

記号で答えなさい。

- ア 愛読書 イ 不平等 ウ 難問題
エ 衣食住 オ 加盟国

問三 ——— ③の理由として当てはまらないものを次より一つ選び、記

号で答えなさい。

ア 個々の昆虫たちが自然の中でどのような働きをしているか、解明されていなかったため。

イ 自分たちの役に立っている虫について、わざわざ研究する必要がなかったため。

ウ 困ったことが起きると、何とかしなければならず、害虫にばかり目が行ってしまうため。

エ 益虫の役割を目にする機会がないから、関心を持つことができなかったため。

問四 [④] に当てはまる言葉を本文中より漢字四字でぬき出しなさい。

い。

問五 [⑤]、[⑦]、[⑧] に当てはまる言葉を次よりそれぞれ

を選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えませ

ん。

ア それでは イ あるいは ウ 例えば

エ だから オ そして カ けれども

問六 — ⑥について、次のA、Bは、四つのサービスのうちどれにあたりますか。ア～エよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 治療りょうに使うために、植物から漢方薬を作る。
B 美しい風景を写生し、楽しむ。

ア 供給サービス イ 調整サービス
ウ 文化的サービス エ 基盤サービス

問七 — ⑨について、ハナバチやミツバチの活躍について、生徒たちが話し合っています。次のⅠ、Ⅱ、Ⅲに当てはまる内容をそれぞれ本文中より指示にしたがってぬき出しなさい。

生徒A ハナバチたちは、農作物の生産に欠かせない存在で、送粉のときに役立っているんだね。

生徒B 特に、広大な農地では、人が手作業で送粉をするよりも、効率がいいね。

生徒A ハナバチたちが花粉を媒介すれば、たくさんの特利があるのか。

生徒C そうだね。Ⅰ(六字)の生産や、Ⅱ(四字)果実を作ることもできるんだね。

生徒D それを人の手でしようとする、Ⅲ(三十程度)ならないんだね。

生徒A ハナバチってすごい！

問八 — ⑩について、ハナバチたちが利用されている面積と栽培されているものの種類の組み合わせとして正しいものを選び、記号で答えなさい。

ア	イチゴ…2400ヘクタール	メロン…850ヘクタール
イ	イチゴ…1600ヘクタール	トマト…2400ヘクタール
ウ	スイカ…850ヘクタール	トマト…2400ヘクタール
エ	メロン…1600ヘクタール	スイカ…2400ヘクタール
オ	スイカ…850ヘクタール	トマト…1600ヘクタール

問九 — ⑪について、どのような変化が考えられますか。本文から読みとれることを一行で書きなさい。

